

長坂 覚 著

『隣の国で考えたこと』

日本経済新聞社 1977年 272ページ

I

専門的研究者ではないが、何らかの理由で韓国に長く滞在し、帰国後、自分の体験に基づいた韓国に対する考察を本に著す例が近年かなり見うけられる。また結構よく読まれているようである。

読む方からみれば、手頃な専門書がなく、新聞記事などの断片的な情報から一步進んで韓国の全体像をつかもうとすれば、そのような書物に頼らざるをえないのであろう。また書く方からみると、韓国の社会が日本人として比較的とりかかりやすいこともあるだろうし、日本にいるとき抱いていた韓国イメージが、現地へ行って修正を迫られるという一種新鮮な驚きも作用しているとみられる。

そういうわけで、およそ新聞社のソウル特派員にして、帰国後、本を出さなかったものの方が少ないほど、次々にあらわれる「特派員もの」をはじめとして、大学の先生による「韓国社会考察」、はてはビジネスマンのものまで枚挙のいとまがないのである。

ここにとりあげた長坂覚著『隣の国で考えたこと』もそのようなものの一つであるが、著者が本来あまり自己を活字で表現しようとしないう現職外交官であること、一般に敬遠されがちな「反日感情」の問題などもとりあげていることなど、他にみられない特徴も持っている。さらに、著者の言によれば、日本人が韓国について何か発言するようときには、その前提としてもたねばならない韓国に対する最低限の常識というものがあるはずであり、著者なりにそれを示してみたのが本書だということで、体験談などから一步進んで、韓国の歴史やその日韓比較など幅広い内容も持っている。

本書の大きな部分を占める韓国史上のいくつかの主題に関する著者の解釈が、どれほど独創的なものなのか、専門的な立場からみて妥当性をもつかどうか、疑問の余地が少なくないだろうし、実のところ評者はそれを適確に論評する資格がないのだが、上述したような本書の特徴に注目し、内容のかんたんな紹介と、評者なりに感じた問題点を指摘したいと思う。

II

著者はまず、日韓両国民の間にはアンティパシー（相互嫌悪）の感情が存在し、その基本的心理構造は、「相手はしかるべき理由があつて日本を憎み、日本は相手が日本を憎んでいる、あるいはなつかないという理由で憎み返している」のだととらえ、このような悪循環を日本人の側から克服するには、「すぐ韓国人の国民性に帰することなく、その背後にある日韓の歴史の重みに想いを致す」ことが大切だと述べ、ここに本書のモチーフがあると述べている。

つぎに、そこで問題となるのは、韓国あるいは朝鮮半島の歴史に対する基礎知識を一般人に与えてくれる「良書」がないということだと指摘する。専門家ではない、普通の日本人に「常識」として朝鮮半島の歴史に関する知識を与えなかったのは、著者によれば「66年間の知的空白」のためだという。まず植民地支配時代の36年間は、政治的に韓国の歴史に対する自由な研究が制限されており、教育においても意図的に日本に都合のよいように修正したのであるが、戦後においても、朝鮮半島に対する歴史研究は「マルクス史観」による偏向のために、日本人の常識を改善する役に立たなかったというのである。このような非客観的認識に終始した66年間に較べれば、明治期の著作の方がむしろ偏見にとらわれていなかったと、著者は評価するのである。

このように、現在にいたるまでの日本人の韓国認識の歴史を総括した後で、著者は、言語、人種、古代の日韓関係、封建制、近代化など、日韓の歴史を比較する際の主要な諸点について、著者なりに、これがまあ客観的な常識ではないかという見解を述べるのである。

第1の言語について、著者は日本語学者が韓国語を研究をしないのはおかしいという全く正当な批判を加えた後に、日本における漢字の音読みが、韓国の漢字の発音のしかたと古くは同じだったにちがいないという「発見」から進めて、今はかなり違っているとされる日韓の発音の差も細かくみるとそれほど違ってないこと、さらに、日韓固有の単語についても、「風化」による変化とみられるものが多いこと、結論的にいって、日本語に関する「混合言語説」が強調するほど、日韓の言語の差はなく、常識的にはごく近い親縁関係を認めうるのではないか、というのである。

第2に、古く言語が共通だったとしたら、人種においても差異があったはずがなく、現に、現代の日本人と韓

国人についてほとんどみわけがつかないではないか、日本人は北方系と南方系の混血だというのは、たとえそのようなことがあったとしても、あまりにも南方系の要素を強調すぎるのではないかと批判するのである。

このように、言語と人種に関しては、日韓ともに祖先を同じくするということは、戦前の「日鮮同祖論」のために、心理的に抵抗感があるとしても、受け入れざるをえないのではないかとするのである。

第3に、古代の日韓関係、とくに統一新羅と日本との関係について、著者は統一以前の百濟と百濟の敵対関係が、百濟滅亡後百濟系遺民の大挙日本移住を通じて日本と新羅の関係に投影されたのではないかと指摘し、そうみることによってのみ、日本の対新羅、対渤海外交の違いが理解されるという。

第4の封建制については、著者はこの封建制の発達如何が日韓の歴史をその後まったく別のものにした岐路だったと強調している。

すなわち、日韓ともに12世紀末に武家政治（鎌倉幕府と崔氏政権）を成立させるが、それが存続して封建制が定着した日本に対し、韓国では武家政治が挫折し、文官貴族による中央集権制が強化され、そのまま李朝に踏襲されていったとし、このような差が生じた原因として、著者は第1に地理的条件（韓国は日本より面積が狭く、気候が寒いために土地の生産力が低く、地方分権が発達する余地が少なかったこと）、第2に中国の官制の影響が朝鮮半島では大きく、科擧の制度によって、優秀な人材が中央政府に吸収されたことをあげている。

このような封建制の発達如何という問題は第5の近代化過程における日韓の相違にも反映したというのが著者の見解である。韓国の近代化（先進文明の吸収）は日本より30年遅れたが、これこそ今日までの日韓の歴史を決定的に違ったものにした要因であり、それはまず欧米からみて韓国は日本や中国よりさらに離れたところにあるとみられていたため、接触それ自体が遅れたこと、第2に、韓国の地理的条件が欧米の大型艦隊の接近を困難にしたため、攘夷に成功してしまつたこと、第3に、近代化開始期の社会状況が封建制度の未発達のために、近代化に不利に働いたことに基づくことなのである。

第3の点をさらにふえんすれば、ライシャワーの日本史論などによりつつ、封建制度（地方分権）のもとでは個人が（中央集権制と較べて）より自由な立場にあり「近代化に不可欠な人口の層」を厚くしたというのである。

このような近代化30年の差が一方を支配国に、他方を

従属国にする結果を生み、それが今日に続く日韓両国のアンティパシーの根源であると、著者は結論するのである。

以上のように、古代から近代にいたるまでの韓国の歴史のいくつかの屈折点を日本のそれと対比しつつ明らかにした著者は、もう一度日韓間のアンティパシーの問題に立ち返り、韓国の側からこの感情を克服する道について、日本人がかつてその経済成長の達成を通じて英国コンプレックスを解消したことを想起しつつ、結局韓国も経済成長によって日本の水準に追いつき、自信を獲得することが一番の近道だと述べ、そのため日本が積極的に協力することが大切だと強調するのである。

III

著者の朝鮮史に対する見解についてはここでは論評を差し控えたい。アイデアとして面白いものもあるし、ちょっと乱暴な議論かも知れないものもあるが、著者自身研究論文として論争をいどうとして出されたものではないだろうと思うからである。むしろ、専門研究者（日本および朝鮮を含めて）の数ある論作をさしおいて著者が歴史論を展開したのは、「史観」にとらわれた硬直した見解や、あまりに細かい点にこだわったものが多くて、本来それらの研究者がめざしているはずの一般民衆の朝鮮認識の変革にいつこう役立っていない状況に対する著者なりの警告と受け取っておくべきであろう。

ただ、善意の朝鮮史研究者のために一言つけ加えるならば、著者のそれぞれのテーマに関する見解は、「日鮮同祖論」、「停滞性史観」とよばれている諸見解（政治的修辭を除いて）とそれほど遠くないところに立論があるようであり、実は戦後の朝鮮史研究の最大の努力がその実証的克服にあったし、現に行なわれつつあるのである。「良書」がないとすれば、いまだにそのような努力が結果をみていないということなのだろう。

むしろ評者が問題だと思うのは、著者が今日の日韓間のアンティパシーと、併合期のそれとを同一視している点である。あるいは、併合にともなって生じた韓国人の反日感情がそのままの形で今日の韓国人の日本嫌悪感につながっているのかのようにとらえているということである。

日本の植民地支配に対する韓国民の強い抵抗とそれを精神的に支えた長い独立国としての伝統を理解しなければならぬということ、古代からの朝鮮史の考察へと著者は進むのであるが、それは結局のところ、一方を植

民地に転落させ、他方をその支配国に分離させる歴史の流れを論理的に説明することになり、その結果としてのアンティパシーの発生をいたし方のないものとして受け入れてしまうことになるのではないかと思うのである。そして、このアンティパシーの解消はそのような両国関係の修正としての経済格差の縮小しかないという結論に至っているのではないかと読めるのである。しかし、今日の韓国人の対日嫌悪を真に理解するには、近代から古代へ遡るのではなく、植民地化以後から今日に至るまでの韓国の歴史を認識しなければならないのではないかと思うのである。著者は朝鮮史認識に対する66年間の空白を強調するのであるが、評者はその66年間の韓国人の生きざまに対する日本人の認識の空白こそ重要だと思ふのである。今日の韓国人は、その66年間、常に日本人を意識しつつ生きてきたのだが、日本人の方はほとんど無視してきたといえるのではないか。もちろん、戦後についてだけみても、朝鮮戦争、李ライン問題、日韓会談等、多くの日本人の関心を集めた出来事が少なくなかったが、問題はそれらの時期に、韓国人の人々がどのように生き、日本人の対応の仕方をどのようにみていたのかということについては少しも考慮が払われなかったのである。

事件が起こるごとに、韓国人の反日感情が秀吉の侵略、閔姫殺害事件、三・一運動に対する弾圧、関東大震災にともなう在日朝鮮人虐殺事件などに言及される形で表現されるのは事実であるが、韓国人の反日感情を持続させているのはそれらの過去の出来事それ自体ではなく、いわんやそれらの過去の出来事について日本人が韓国人の立場に立ってとらえ直すことをしなかったということではさらさらなく、66年間にわたって日本国および日本人が韓国に対してしてきた具体的なことの積重ねであり、それがいっこう改善されたように韓国人にみえないからではないかと思うのである。

著者のように、近代から過去に遡ってしまう接近方法は、66年間ですっぱり除いて、韓国論あるいは韓国人観をつくるということになるのではないかと危惧される。このことがもたらす欠陥はさしあたり二つの側面においてみることができる。第1に、在日朝鮮人問題や北朝鮮と切離して韓国論を展開したり韓国人の反日感情を理解しようという姿勢が生ずるということである。前者について著者は、韓国人を考える場合日本にいる朝鮮人を見ないで韓国にいる人々をみてくれという、韓国政府要人のことばを引用することによって、在日朝鮮人社会の切

離しを正当化しようとしているが、その政府要人の意味合いがどこにあるかはともかくとして、日本人の韓国イメージを問題にするときには、そのような切離しは日韓関係史の重要な部分を欠落させることにしかならないだろう。また、北朝鮮のことについて著者は、客観的に描くことができないから責任をもって発言することができないとして回避しているが、著者の自己限定はともかくとして、韓国社会、韓国人の意識ひいては対日感にも大きな影響を及ぼすそのことを除いた韓国論は、韓国論それ自体を限定することになり、さらに日本人の韓国認識に一定の偏向を与えることになるのではないかと思うのである。朝鮮戦争のとき、日本が援軍を派遣するという話がでたとき、李承晩が、そのときにはまず北朝鮮軍とともに日本軍を追いだすために戦うといったとされているが、このように微妙な韓国人の対日、対北朝鮮意識は今日も脈々と生きていのである。

第2の欠陥は、金大中事件や文世光の大統領狙撃事件に関連して、著者が日本のマスコミの偏向を強く非難していることとも関係することであるが、韓国人の今日の反日感情がそのような一部マスコミの無責任かつ不勉強を暴露した報道によって増幅されることはあっても、決してそれが基本要素ではないということである。著者がいうほどに、日本のマスコミが直接韓国の民衆に影響を与えることはまずないし、第1、日本のマスコミがいかげんな報道をしたからといってそれにいちいち腹をたてているほど彼らは暇ではないのである。基本的には日本の対韓姿勢、外交や経済交流のあり方が不満の底流に強固に存在し、それがちょっとしたキッカケで噴出してくるのだととらえるべきではないだろうか。

結論的にいって、植民地以後の歴史の中に問題を追求しない方法は、今日の韓国人の反日感情の構造を理解することにはつながらず、著者も指摘しているように韓国人がまた「昔の事」をむし返しているということになってしまわないかと思うのである。

(谷浦孝雄 アジア経済研究所調査研究部)